

## 【展示解説資料】

盛岡市遺跡の学び館 平成 28 年度 第 14 回企画展

# 縄文人の精神 — 盛岡の縄文時代中期の装飾 —

会期：平成 28 年 10 月 8 日（土）～平成 29 年 1 月 15 日（日）

## ■開催にあたって

1 万年にも及ぶ縄文時代のなかで、姿かたちを多様に変化させながら製作された縄文土器。なかでも縄文時代中期(約 5,000～4,000 年前)は、新潟県馬高遺跡の火炎土器や山梨県安道寺遺跡の水煙土器に代表されるように立体的で華麗な装飾の施された土器が出土しています。

盛岡市内でも、繫 V 遺跡の深鉢形土器をはじめ、大館町遺跡の大形深鉢形土器など、大胆かつ優美な曲線で描かれた渦巻文様や顔を思わせる土器が出土しており、縄文人の精神的な高揚をうかがわせます。

本展示では、盛岡市内から出土した中期の土器を御覧いただき、装飾に込められた縄文人の思いにせまります。

## ■盛岡の縄文時代の土器

縄文時代は、草創期(約 12,000～9,500 年前)、早期(約 9,500～6,000 年前)、前期(約 6,000～5,000 年前)、中期(約 5,000～4,000 年前)、後期(約 4,000～3,000 年前)、晩期(約 3,000～2,300 年前)の 6 つの時期に区分されます。草創期の土器は、丸底状の底部をもち隆線文や爪形文といった単純な文様が施されます。早期には、底の尖った土器が多く製作され、50cm を超える大型土器も作られます。前期になると、煮炊きや貯蔵に使用する土器が多量に製作され、円や曲線を多用した文様が表現されるようになります。安定した食糧事情のもと、多数の竪穴建物跡が密集した大規模集落が出現する中期は、前期の土器をさらに発展させた土器が数多く作られます。また、新潟県馬高遺跡の火

が出現します。同じ頃、東北南部を中心に発達した大木式土器文化、東北北部を中心に発達した円筒式土器文化も最高潮を迎えます。市内でも、大館町遺跡や繫 V 遺跡、柿ノ木平遺跡といった大規模集落から、立体的な渦巻文様の施された土器が多数出土しています。後期になると、壺や注口土器が多く製作され、流れるような曲線を多用した文様が主体となります。後期後葉には、入組文や玉抱文などの文様が出現します。晩期は、後期後葉の土器をさらに発展させます。文様や器面を磨いて光沢を出した土器が多く製作されるようになります。羊歯状文や雲形文など浮き彫りにしたような文様が施されますが、晩期後葉になると直線的な文様にかわり、弥生時代を迎えます。

## ■大木式土器

大木式土器は、宮城県大木囲貝塚出土遺物を基準資料とする東北地方縄文時代前・中期の土器型式です。「大木式」の名称は、1917 年の東北帝国大学の松本彦七郎博士、1918 年の長谷部言人博士による大木囲貝塚の調査をもとに、1919 年頃より用いたのがはじめとされます。1927～29 年には、山内清男氏が大木囲貝塚 A～E 地点を調査し、層位的に出土した土器を検討し、大木 1 式から 10 式を設定しました。大木 1 式から 6 式は縄文時代前期に、7a 式から 10 式は縄文時代中期に位置づけられ、現在に至るまで大きな変化はなく、縄文時代前期から中期の土器編年を知るうえで、貴重な資料となっています。

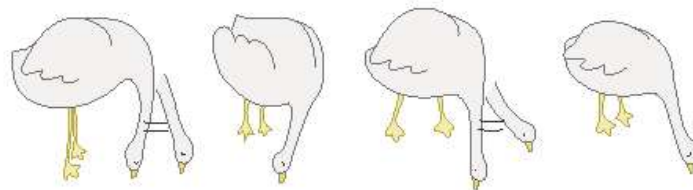
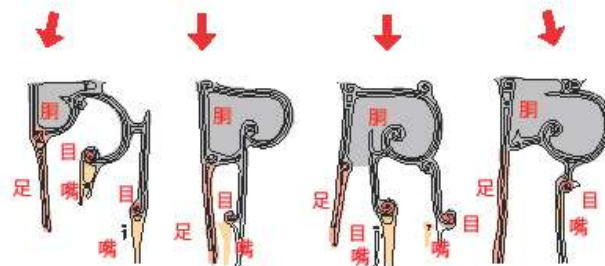
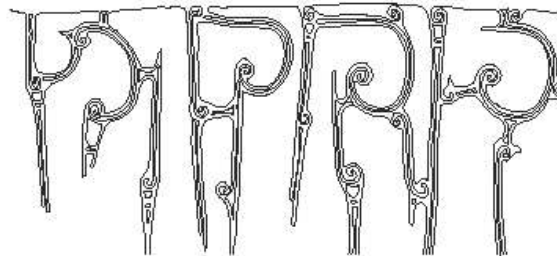
## ■土器の文様

隆線や隆沈線を用いながら、直線や曲線などを組み合わせ規則的に描かれていた文様は、縄文時代中期になると自由な変化をみせます。不規則に展開する文様は、土器を飾るだけにとどまらず、文様自体に特別な意味を持たせたとされ、このような文様は物語性文様と呼ばれています。いったい何を表現したのでしょうか。土器展開図を用いて観察すると、抽象化された動物や人間の動作を思わせる文様が読み取れます。



大形キャリパー形深鉢形土器（柿ノ木平遺跡）

### 渦巻文様の展開



頭を動かす水鳥

水鳥

頭を動かす水鳥

水鳥

大形キャリパー形深鉢形土器展開図

## ■土器を飾る

縄文時代中期中葉の頃、北陸地方では、口縁部に炎あるいは動物をイメージさせる立体的な突起を持つ火炎土器が製作されるようになり、中部高地地方では生物や人面を思わせる装飾のついた土器が数多く製作されました。盛岡市内でも、大館町遺跡や繫V遺跡、川目C遺跡から様々な突起や把手のついた土器が多数出土しています。

中部高地地方の装飾突起付土器にみられる人面表現は、土器の中に溢れ続ける食物を願う心の現れ、豊かな実りや再生を祈ったとして製作されたとする説があります。

盛岡市内の装飾突起・把手付土器は、中空の眼や口を思わせる表現がされています。大きく見開いた眼や口は外界を見張り、邪悪なものが入らないようにする結界の役割をはたしていたのかもしれませんが。



装飾突起付キャリパー形深鉢形土器（大館町遺跡）

## ■装飾を施す

土器に装飾を施すことについて、藤森栄一氏は『縄文農耕論』のなかで「煮ること蒸すことによって生をたたれ、人々の命の糧となった実が、また新しい命となって蘇ってくることに對する、切実な願いからではないだろうか。……植物を主体とするかれらの生命の糧、またはそのいのち自体の、いくらでもふえてゆく祈りにつらなるものだろう。」と説明しています。貯蔵や煮炊きすることで新たな食糧を作り出す器に、豊穡や再生の祈りを込めたのは必然的であったかもしれません。

このような土器が出現した背景に、縄文時代の人々の共同生活化が挙げられています。狩猟採集などに際し、集団で行動することで仲間意識が芽生え、結びつきを強めるための手段として祭が行われるようになった、その際に身近な道具として土器が使用されたとするものです。

施文方法について、小林達雄氏はオーストラリアのワルビリ族を例に、文様モチーフ各部に名が付き、歌にのせて描くことで、複雑な文様も躊躇なく暗誦できるとしています。

### 【主要参考文献】

- 1969 藤森栄一『縄文式土器』
- 1970 藤森栄一『縄文農耕』
- 1970 小学館『原色日本の美術1 原始美術』
- 1984 江上波夫『図説世界の考古学3  
先史時代のヨーロッパ』
- 1994 小林達雄『縄文土器の研究』
- 2007 土肥 孝『日本の美術10 縄文土器 中期』
- 2008 西本豊弘『人と動物の日本史1 動物の考古学』
- 2009 岡村道雄『日本の美術515 縄文人の祈りの道具』
- 2010 末木健「縄文中期の抽象文世界—龍か山椒魚か蝮か」  
『山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター 研究紀要26』

## ◆コラムⅠ 岡本太郎と縄文土器

岡本太郎は、大阪万博（1970年）のシンボル「太陽の塔」や、東京の渋谷駅連絡通路にある巨大壁画「明日（あす）の神話」（2008年設置）で有名な芸術家です。岡本が1952年に発表した「四次元との対話—縄文土器論」は大きな社会的反響を呼び、縄文土器が日本美術の始まりとされるようになります。

岡本の議論は、太平洋戦争以前までの皇国史観から脱却して、科学的・実証主義的学問としてスタートした当時の考古学界には受け入れられませんでした。しかし近年、それを縄文土器の造形デザインを理解する重要なアイデアとして再評価する動きがあります。（石井2009, 2012）そのキーワードは「神話的（しんわてき）思考（しこう）」であり、縄文人は可視の現実世界と不可視の超自然世界とが直結した世界観に生き、それが造形に反映されていると考えます。岡本はそれを「四次元との対話」と呼び、つくり手の縄文人と素材の粘土が一体となり、“命あるもの”として縄文土器が生み出されたと言います。関東や中部高地の土器ほど具象性がない中期大木式土文様の中にも、生命的なモチーフを見出すことが出来る理由が、そこにあるかもしれません。



太陽の塔

## ◆コラムⅡ 南太平洋の土器

過去の人類である縄文人から直接話を聞くことは不可能ですが、縄文人に近い生活・文化を現在まで残す未開社会の人々の民族誌調査をその手掛かりにすることができます。

南太平洋に位置するパプアニューギニアは、多くの自然と民族芸術を今に伝える南国の島です。その文化の中には、動物や人間の顔を形象したり、文様で装飾した土器があり、煮炊き用の鍋、貯蔵用や儀礼用の壺などが、現在も日常の暮らしの中で使用され続けていることが知られています。

近年では、縄文土器型式の成立過程を研究する目的で、パプアニューギニアの民族誌調査が行われています（高橋2014）。中でも、セピク川中流域のクウォマ族は、彫刻的な文様が全面に施された土器を使用していますが、その文様は自然の精霊を意味することが製作者により語られています。ありのままの自然を敬い、畏れる精神世界の表現は、縄文時代の土器文様と共通するのかもしれませんが。

（NHK『アジア巨大遺跡』第4回「縄文 奇跡の大集落」2016年）



パプアニューギニアの位置

石井 匠 2009『縄文土器の文様構造—縄文人の神話的思考の解明に向けて—』

2012「2章 縄文土器の造形デザイナー—秘められた「四次元」の探求へ」『縄文土器を読む』

高橋 龍三郎 2014「民族誌を用いた土器型式の動態把握のための理論的研究」科学研究費助成事業研究成果報告書